

アドラー心理学への道

イヴォンヌ・シューラー (スイス)
大竹優子 (大阪) 訳

要旨

キーワード：

はじめに

私が4歳か5歳のころのことです。祖母と叔母たちが私に言いました。弟か妹がほしいです、
って、あなたの願いを手紙に書いて、コウノトリに出しなさいって。彼らはとてもわくわくして
いるようでした。が、母親はこの提案にあまり感心していないように感じられました。(後にな
ってわかったのですが、子どもが生命の事実をどうやって学ぶべきかについて、母は別の考えを
持っていたのです。それはコウノトリが赤ちゃんを運んで来るのだと子どもに教えることでは、
決してありませんでした。)

このとき私は、コウノトリは字が読めるのかどうかわかりませんでした。動物はおとぎ話のな
かではいろいろなことができます。コウノトリもたぶんお話ができるでしょうから、きっと字も
読めるのでしょうか。でも私は、自分が字を書けないことははっきりと知っていました。私は叔母
たちに、字が書けないと言いました。しかし彼女たちはこう言ったのです。「大丈夫よ、なにか
サインをしておけばいいの。コウノトリはきっとわかってくれるわ」

ここで私は、彼女たちが嘘をついていることに気がつきました。しかし同時に、もし私がそう
言ったらやっかいなことになるだろうとも気づいていました。

彼女たちは私を椅子にすわらせ、紙と鉛筆をくれました。私は線を描き始めました。その間中
ずっと、これがナンセンスだとわかってはいましたけれども、私は次から次へと線を描き続けま
した。しばらくすると叔母たちはもうたくさんと思ったのか、私に言いました。「もういいわ。」
しかしそのとき私は、すべての権力は私の手の中にあると知っていました。そして言いました。
「だめよ。まだ終わっていないもの。」

私はずうっと描き続けました。大人たちは私の周りに立っていましたが、やめさせることはで
きませんでした。かなりの時間がたってから、私は許してあげることにして、描き終えました。
叔母がその手紙を手にとって言いました。「さあ、それでは、これを窓の敷居のところに置きま
しょう。お砂糖をひとかけ一緒においておいたら、コウノトリが来てこれを持って行くでしょう。」

彼女たちが嘘をついていることを抜け目なく見抜いて、私は試そうとして言いました。「まあ、

すごいわ！生まれてはじめてコウノトリをみるんだわ！」「だめよだめよ！」彼女たちは言いました。「コウノトリはとても恥ずかしがり屋なの。人が見ているところでは手紙を持って行かないでしょう。私たちは家の中の別の場所にいた方がいいわね。」

私たちはみんなでキッチンにこもりました。私はいい子にしていたので、いつもは菌によくないからといって食べさせてもらえない甘いお菓子を、今ならおねだりできることがわかっていました。お菓子をもらい、家族中の女性たちに囲まれて、私はキッチンテーブルのところに座っていました。私はごほうびを味わっていましたが、また、人々がどうやってこの喜劇を続けるのかも知りたくてたまりませんでした。

しばらくして一番年上の叔母が言いました。「ちょっと行ってのぞいてみるわ。コウノトリはもう手紙を持って行ったかしら。」

彼女がこっそりと歩いていくその姿を見て、私は彼女は戻ってきたときに、手紙も砂糖もまだそこにあったと言うだろうと予想しました。彼女は戻ってきて言いました。「まだあったわ。」

またしばらくして彼女はもう一度のぞきに行きました。まだあったというか、それとも、もうなくなっていたと言うか、今度は私にはわかりませんでした。彼女は戻ってきて言いました。「まだあったわ。」

今はもうはっきりとわかりました。三回目には彼女は「なくなってたわ」というでしょう。そして三回目、手紙はなくなっていました。

この物語は、早期回想をみると、その中で個人がどんな長所やリソースを思うがままに使っているかがはっきりとわかる、と示してくれています。実際これは、他人を見抜いて人がどう行動するかを予測する直観力を持つ、5歳の心理学者のお話でした。

私はこの力を、持って生まれたのでしょうか？それとも、大きくて強くて能力のある大人の世界、つまり、他の人たちがすべての権力を持っていた世界に、たった一人の子どもとしていた頃に、この力をのばしたのでしょうか？

どちらも正しいのかもしれませんが。しかし、私は自分のストレンクスや弱点を、「家族」と呼ばれる大きな実験室で、実験と失敗を重ねて発展させたのだと信じています。

どのように職業を見つけたか 一同世代の女性の典型的な進路の中で

私は自分と同世代の女性がとる普通の進路の中で自分の職業を見つけました。私のような社会的地位の若い女性が高等教育を受けることは一般的ではありませんでした。親が高等教育を受けさせる目的は、娘の結婚のチャンスが増えることでした。

もし20歳の時に、占い師が、あなたは2010年に日本で心理学のコースを開くでしょう、と予言したとしたら、私はたいそう驚いたでしょう。75歳になってもまだ元気で動いていると聞いたらとてもうれしかったでしょうし、遠い異国で働くということはもっともらしく聞こえたことでしょう。なぜなら、私の父もそうしていたからです。しかし私は、自分が心理学者になるということに関しては、信じられなかったのではないかと思います。

私は商人や実業家の間で育ちました。そのような人達は精神科医のことを、患者よりもひどい病気の人達だと考えていました。叔母の一人が精神分析家のところへ行ったらけれども、その後よくならなかったという、ひどい話も聞いていました。精神科医は傷害をひどくするものだと考え

られていたのです。それで私たちは、“PSY”、つまり精神とか心理という文字のつくすべてのものを、きれいに避けていたのです。

さてそれでは、運命はどのようにして私をこの場所へと、光栄にも日本の仲間に心の学問である「シンリガク」についてお話しているこの場所へと導いたのでしょうか？

私は先ほど、子どもは、技術だけでなく弱点も、「家族」と呼ばれる実験室で磨く、とお話ししました。私は過保護に育ちました。それで、私に起きた問題はすべて両親が何とかしてくれることに慣れっこになっていました。両親が善意でそうしたことは確かですが、その甘やかしの結果は、彼らが期待したのとは反対のものでした。たとえばこんなことがありました。私は数学が大の苦手だったので、両親は、私の数学の先生ひとりひとりに、私に個人授業をしてくれるように頼んだのです。高校時代を通して、私は 200 時間をゆうに超える個人授業を受けましたが、結局私は算術と幾何については全く何もわからずに終わってしまったのでした。私が最後の試験に合格したのは、教授のおかげなのです。彼は、私が答えられないのはどんな問題かを知っていたのでしょ

う。その後私は小学校の教師になりました。仕事はとても好きでしたし、小さな生徒たちのことも、崇めるように大好きでした。彼らがよい時間を過ごせるようにと思って、楽しく学べるようなゲームをあれこれ考え出しました。初めのころは、クラスの規律は簡単に保てました。すべての子どもたちと私は、完全に調和して、一緒に過ごしていました。

1 年後、不運なことに、第 4 学年を留年した生徒が 2 人、私たちのグループに入ってきました。それからクラスの雰囲気ガラッと変わったのです。この少年たちは、まるで小さなアナーキストのように振る舞って、うまくいっていた私のルールを根底から揺るがしました。

何年も後になってアドラーの理論を勉強して、自分のいる低い位置を補償しようとして不適切な行動をする、勇気をくじかれた子どもについて学んだときに、私のクラスで何が起こったのかがはっきりとわかりました。しかしそのころの私は激しく困惑していました。私には彼らの敵意はナゾでした。私のかわいい生徒たちのほとんどはあの大きくて生意気なやつらに感心してしまっており、私でなく彼らの後をついて行くようになってしまっていて、私はとても落ち込みました。

彼らを厳しく罰することで自分の権威を取り戻そうとしましたが、だめでした。反対に、だんだんと敵意に満ちた雰囲気になっていきました。ほどなく私は全く途方に暮れてしまいました。自分の手には負えない大きな問題を抱えてしまったのです。しかし、誰も、両親さえも、私を救いに來ることはできませんでした。もうたくさんでした。そして私は逃げ出しました。大好きだった仕事をやめたのです。

私は結婚しました。そして、最初の息子が生まれたとき、私は自分が強く望んでいたものやとみつけたと確信しました。そして次に女の子を授かって、人生はいっそうすてきになりました。子どもたちはただただすばらしかったのです。彼らの人格がはっきりしてくるのを見るのはとても楽しかったですし、クリエイティブなゲームを發明して彼らのすばらしい技能を育てるのも楽しいことでした。

しかし、3 番目の子ども、男の子が生まれてまもなく、とても困ったことに、何年か前にクラスで起きたのと同じような災難が起きてしまいました。家族の赤ちゃんとしての居場所を失った

娘が不幸になり、復讐的になってしまったのです。私は、この小さな女の子がヤキモチをやいていることはわかっていたのですが、どう向き合ったらいいのかわかりませんでした。幸せな笑いは今や絶え間ない大声と叫び声に替わり、私は、警察官になったかと思うと裁判官になったり看護師の役をしたり、そんなことを朝から夜遅くまでしていました。

私が悩んでいるのを見て、親友が、ルドルフ・ドライカースの有名なベストセラー『勇気づけて躰ける』（“Children : the Challenge”）を教えてくださいました。この本の中には、なんだか気のすまない教育法が書いてありました。教師修業をしていた頃には、こんな変わった方法は聞いたこともありませんでした。

子どもがけんかを始めたら母親は寝室へ撤退すべきだ、とか、けんかが終わるまでドアを閉めて落ちて待っていなさい、とかドライカースはいうのです。これだけでも十分変わっているのに、もっと変わっているのはそこについての彼の説明でした。子どもたちがけんかするのは、ただ母親を忙しくさせておこうとしているのだ、というのです。子どもたちが母親を怒らせ、母親が彼らをしかったり罰したりするようと仕向けるのは、母親の注目・関心を得るためだというのです。母親の注目・関心を引くこと、これが彼らの隠された目標だ、というのです。

私はとても惹きつけられると同時に、ショックを受けました。読みながら私は、ずうっと首を横に振り続けていました。なんだってこのクレイジーなアメリカ人はわざわざこんな風変わりなことをいうのでしょうか？ なんだって彼はこんなむかつくような新しいものの見方を、うまく確立している教育理論の世界へと持ち込むのでしょうか？

しかし私には他に選択肢がありませんでした。子どもに対するやり方を変えるか、さもなければ精神病院に入るかの状態だったのです。それで私は、3人の子どもたちに対してドライカースの方法をやり始めました。すると驚くほどうまくいったのです。

彼らのけんかを初めて放っておいたときのことを、私は忘れられません。下の男の子が私のところへ助けを求めて叫びながら走ってきました。彼は、悪い魔女のまねをする姉に追いかけていたのです。普段だったら、抱えていた洗濯かごを落として彼を助け出しに飛び込み、キスをして涙を払って、姉の方には、脅かしたらだめでしょ、彼はまだ小さくて、遊びだなんてわからないんだから、と言ったことでしょうか。このときは私はこの上なく静かに、やさしく彼に尋ねました。「おばけごっこしてるの？」これには、ドライカースは正しいと証明されるに足る、信じられないほどの効果がありました。2人ともフリーズしました。叫び声はラジオを消したように静まり、そして4つの瞳は不思議そうに私を見ています。ママがお芝居にのってこない！ この瞬間から私は、Dr.Dのファンになったのです。

とはいえ、ドライカースを初めて読んだ親たちのほとんどがおちいるのと同じ間違いを、私も初めのうちはしていたことを認めなければなりません。この新しくてきわめて強力な戦闘技術を学ぶと、それを、子どもを支配するために間違った使い方をしてしまうのです。しかし、親たちの計算外のことがあります。それは、子どもたちは、とても学びの早い生徒だということです。子どもたちはすぐにこの方法を採用し、親たちに対してそれを使うようになるのです。親が子どもに対して論理的結末を使うと、子どもたちは親に対してお返しに論理的結末を使って脅かすのです。

たとえば、こんなできごとがありました。家の近所でのパーティーに行こうとしていたときの

ことです。子どもたちは、昼間外で遊んでいたときにセーターを脱いだのですが、そのセーターが見あたりませんでした。セーターが見つかったらパーティーにいらっしやい、私は先に行っているから、と私は彼らに言いました。私はドアに鍵をかけ、先に行きました。これは、公平なやりかたのはずでした。ただし、もし私が、だらしのない子どもたちがアイスにありつく前に探し始めるようにさせようと、意地悪な楽しみを感じていなかったならば、です。1時間後、彼らがパーティーの場所へ姿を見せないの私は落ち着かなくなり、家の周りをくまなく、彼らを探してまわりました。子どもたちがいない！ 私は搜索を始めるために電話をかけようと、家に戻りました。そして鍵を開けて、台所へ入りました。するとそこには子どもたちが座っているではありませんか。アイスボックスからアイスを出して食べていました。子どもたちは私を負かしたのです。彼らは窓の隙間から家に入り、セーターは依然として藪のどこかにおいたままでした。

子どもたちと私が、ただ単に今までよりも手の込んだやり方をするようになっただけで、物事は何も変わってはいなかったのです。このことに気づくまでには、まだしばらく時間がかかりました。私はまだ「平等」というものが社会生活の鉄則なのだと、信じようとしていなかったのです。

ドライカースとの出会い ー転機

幸運なことにちょうどそのとき、ルドルフ・ドライカースがチューリッヒで1週間のセミナーを行うことになっていました。1968年のことです。私は33才で、人生を続けるために何が何でも新しい哲学を必要としていました。

このセミナーには90人の人が参加していました。彼らは、この世界的に有名な著者に会って教える受けるために、ヨーロッパ中から来ていました。ドライカースの第一印象は、あんまり私の好みじゃない感じでした。ずんぐりした老人で、フォーマルなダークスーツに赤の蝶ネクタイをしていました。よりによって蝶ネクタイですよ！？これが教育の世界に革命をもたらした人物だなんて、私にはとても信じられませんでした。彼の風貌は、そのころの教師や講演者とはまったくかけ離れたものだったのです。考えてもみてください、それは60年代のことだったのですよ。教師とか講演者といった人達はみな、モダンでカジュアルなスタイルをしようとしていました。ジーンズと開襟シャツでなければ進歩的な人とは見なされなかった時代でした。

しかしドライカースが話し始めるととたんに、風貌などはまったく問題ではなくなっていました。

彼の最初の要求は私にとってショックでした。全員自己紹介をしなければならなかったのです。地獄へ落ちたようでした。なぜなら他の人達は、本を執筆していたり、教授や精神科クリニックの院長といったような、目立った学位や地位のある人達だったからです。私は自分が取るに足りない人間のように思われ、しっぽを巻いて逃げ出したくなりました。が、ついに私に自己紹介の番が回ってきて、私は3人の子どものいる、ただの主婦です、と自白しました。ドライカースの反応は、まったく仰天するものでした。彼は私を指さして、他の受講者に言ったのです。「このような人にこそ、まさにこのコースを受けて欲しいと私は望んでいたのです！誰よりもまず、母親に教えることが必要なのです！」。

一転して、私はこのすばらしいグループの一員なのだと感じました。私はまさにドライカース

の優れた才能のひとつから恩恵を受けたのです。それは、自分は人々の間に所属しているのだ、という感覚を増幅する才能です。

彼はそれから、彼の教えようとしている様々な方法を練習するためにグループを作ることを求め、聴衆の反感を買いました。それは聴衆が望んでいたことではなかったもので、強い抵抗にあったのです。彼らは、グループになった仲間と過ごすためにはるばるチューリッヒまで来たのではない、と言いました。彼らの唯一の目的は、ドライカースから学ぶことだったのです。それなら、とドライカースは言いました。自分はあなた方に教えるつもりはない、と言うのです。目の前の高名な人達に立ち向かう一人の小男は、そこに岩のように立ちはだかり、明らかにその状況を楽しんでいました。長い沈黙の後、みんなはお互いにぶつぶつとささやき始めました。ついに代表者が、私たちはグループワークのために夕食の時間をつぶしたくないのです、と告げました。ドライカースは、誰も夕食の時間までワークをしろとは言っていない、と言いました。そこで聴衆はみなあざんとしました。ドライカースが明らかに的をはずしているように見えたからです。代表者は、コースは夜の 10 時まで続くことを、ドライカースに気づかせようと思いました。するとドライカースは怒鳴りました。「では 10 時以降はどうするっていうんだ？あなた方はまさか夜中は眠りたいって言うんじゃないかならうね？」

これでドライカースは、セミナーでの権力争いに勝ったのでした。とはいえ、結果として一部の受講者の恨みを買うことにはなってしまいました。

しかしながら、私はこれまでにないほどおもしろく過ごしました。ドライカースは一週間のうちに、様々な場でのアドラー心理学のカウンセリングや治療を、理論的、実践的に、デモンストレーションを見せて紹介してくれました。中でも私が一番夢中になったのは、ライフスタイル分析でした。これは、個人のパーソナリティーの核心に触れることができるテクニックだとすぐにわかりました。私は自分のライフスタイルについて死ぬほど知りたくなりましたが、デモンストレーションのボランティアになる勇気がありませんでした。

学んだ事があまりたくさんありすぎて、一晚中夫を起こしていたほどでした。これらすべての新しい経験を、誰かに話して荷をおろさなければならなかったのです。そうしなかったらきっと私は気が狂ってしまったでしょう。

日ごとに私は Dr.D のファンになっていきました。そしてしまいには、彼の所へならたとえ火の中でも歩いていくほどになっていました。彼がこれに気づかずにいるはずがありません。セミナーの終わり頃、コーヒブレイクのときに、ドライカースは私の方へと近づいてきました。彼はある種の催眠のように、私の目をとらえ、私の前に位置してたずねました。「で、あなたは？あなたはどのようなつもりなのですか？」

私自身驚いたことに、私は自分が彼にこう答えているのを聞いたのです。「私は心理学を勉強します。」

心理学者となり、スイス・アドラー心理学会の会員となる

私が勉強を始めるまでには、それから 3 年かかりました。若い住み込みのお手伝いさんに見てもらえば一日中家においておいても大丈夫なくらいに子どもたちが大きくなるまで待たなければならなかったのです。私は、スイスやドイツでときどき行われるアドラー心理学会のワークショ

ップへ行くことで満足しなければなりませんでした。

1920年代のドイツまでさかのぼると、そこにはとても活発なアドラー心理学会がありました。それは国家社会主義体制の間にほとんど消滅しかかり、そして60年代には依然として力が弱いままでした。

スイスでは1948年の終わり頃にSGIPA（スイス・アドラー心理学会）が設立されました。アドラーはスイスで何回か講演をしましたが、ミラ・ムンクやアレキサンダー・ミュラーといったユダヤ人亡命者の助けを受けてアドレリアンのグループが息を吹き返したのは、アドラーが亡くなった後でした。彼らはアルフレッド・アドラーのもとで勉強した心理学者たちで、アドラー心理学に興味を持った一般の人々や、ソーシャルワーカーや医師などに向かって講演をし、アドラーの貴重な理論をチューリッヒにもたらしました。

アドラーの考えを、文字通りカール・グスタフ・ユングの帝国だったチューリッヒで広めるのは、容易な冒険ではありませんでした。フロイト派の精神分析学者もすでにグループとしてよく動いていました。しかし、別のもっとポジティブな、人間性をみる方法を待ち望んでいた人々は、アドラーのすばらしい理論にふれて天啓をうけました。ゆっくりと、しかし確実に、支持する人たちは増えていきました。が、SGIPAにはまだ拠点がなく、計画的なプログラムもありませんでした。講演や講座は不定期的に行われていたのです。

1964年にエリック・ブルーメンタールがSGIPAの会長に選ばれました。そしてこのときから、スイス・アドラー心理学会に勢いがつきました。ブルーメンタールにはヴィジョンがありました。彼は、アドレリアンカウンセラーのトレーニングのために研究所を設立し、それによってアドラー心理学をスイス中に広めたいと思っていました。はじめはスイスの学会の誰も、そんなことができるなんて思っていませんでした。メンバーはほんの少人数でしたし、そのうちの誰も、本来の仕事の傍らにたくさんのボランティアをする時間の余裕がなかったのです。ブルーメンタールの最初の仕事は、ドライカースをチューリッヒに招いてワークや講演をしてもらうことでした。その高名な人は、スイスの学会に援助がいることをすぐに理解して、報酬なしで仕事をすることを承諾しました。

ドライカースはどうしてそのように太っ腹でいられたのでしょうか？彼の亡くなった後に、私は彼の未亡人であるティー・ドライカースと話をしました。彼女が言うには、「夫は裕福ではありませんでしたが、まるで裕福であるかのように振る舞いました。」とのことでした。彼のセミナーからの収入はすべてチューリッヒ・アドラー心理学研究所を現実のものとし続けるために、蓄えられていたのかもしれない。

このすばらしい時代に、私はSGIPAの会員になりました。そしてまだ勉強が終わらないうちに、私はすでに理事会役員となっていました。彼らは献身的に働く意志のある人々を必要としていたのです。そして、このために私は、近道をとって専門家としてのキャリアを積むことができました。

私はとても運がよかったです。すべてのドアが私に対して大きく開いていました。人手が足りなかったので、卒業すると、私はすぐに講師になりました。とても怖かったのですが、一番好きなドライカースのモットーを思い出し、決意を固めました。それは、「不完全でいる勇気を持ちなさい」でした。

もう一人の若い同僚と一緒に私がカップルカウンセリングの講師に選ばれたときは、経験不足を補うために、準備をとてもしっかりとしなければなりませんでした。それを切り抜けるために私たちは創造性を発揮して、デモンストレーションのプロセスを自分たちや生徒たちが手順を追いかけてやすいようにと、すべての方法を開発しなければなりませんでした。今日に至っても私は、チャートやメタファーや、視覚的に助けになる教材を使うのが好きです。水の中に落とされて泳ぎを覚えたために、いまでもその影響の残った泳ぎ方を続けているというわけです。

私がこうして、選んだ仕事を思う存分やることができたのは、夫が、とても寛容に、自分のことを顧みずにサポートしてくれたおかげだと思っています。私がもう一度学生となった瞬間から、私たちの生活は劇的に変わりました。きちんとしていた家は、なんだかジプシーのキャンプみたいになってしまいました。規則正しかった暮らしは壊れ、家族のメンバーはおそろしいほど柔軟に動かなければならなくなりました。子どもたちは、世話をしてくれる人がいない時は自分たちでやることをすぐに学びました。私が学校に行っていた頃には、子どもたちと私が同じ部屋と一緒に座って、それぞれの宿題をしていた、なんてことがよくありました。

休暇も変わりました。海辺へ行く代わりに、家族全員で国際夏期講座、ICASSI へ行きました。そのときから、私のやるすべてのことは、アドレリアンの基準に合っているかどうか、かわいい心理学者たちが細かくチェックしてくれることになったのです。(例えば、彼らは、私が何かアンフェアなことをすると、「それはアンフェアだよ」と言うかわりに、「それは勇気くじきだよ」と言いました。)

振り返ると、私が感謝しているたくさんのたくさんの人々が並んでいます。

—私を誠実に支えてくれた、夫、娘、息子たち、母親や義理の母がいます。誰一人として不満を言うことがありませんでした。

—傑出した教授たち、ヴィクトール・ルイス、エリック・ブルーメンタールは、私を信頼してくれた、心の広い助言者でした。

—すばらしいアドレリアンの仲間たち。私は彼らのグループの一員であることを誇りに思います。

—何百名もの研究所の生徒たちや、私のコースに参加者したすべての人たちは、私の手渡したアドラー心理学のともしびを受け取ってくれました。

—そして、最後ですが決して小さくないのは、クライアントたちです。私の援助を受け入れてくださり、またたくさんのお話を学ばせてくださいました。

クライアントから学ぶ

心理療法家になることは私の人生にもものすごい衝撃をもたらしました。というのは、一番受け入れがたかったクライアントたちこそが、私自身のいやな行動パターンを取り除くのに大変助けになってくれたからです。彼らが同じ間違いを何度も何度も繰り返すのを見て、私は家で同じような行動をして満足することができなくなってしまいました。私はカップルカウンセラーとして、怒った女性や不満のたまった夫が、相手をいらいらさせるような口調で話すのを聞かなければなりませんでした。それはまさに自分と同じような行動をはっきりと見ることだったのです。私はとても恥ずかしく感じ、自分はこの行動はしないようにしよう、とかたく決心したのでした。

今でもなお、クライアントは教えてくれます。私の行動をときどき写し出してくれるだけではありません。あるクライアントとその奥さんのカウンセリングをしていたときに、そのクライアントが私の課題が何であるのかを教えてくれたという、とても貴重な話をさせてください。

彼は言いました。「妻と私は、2つの塔なのです。その間に架かっている橋が壊れて、修理が必要なんです。橋のことがあなたの仕事です。つまり、もっとよい関係でいられるように、よいコミュニケーションができるように手伝っていただきたいんです。でも、それだけではだめなのです！ 塔の方も修理が必要なんです。私たちのパーソナリティのほうのこともお願いします。塔がしっかりと安定していない限り、橋は修理できないでしょう。」

この「使える」メタファーを聞いて私はとてもうれしくなりました。これは結婚生活の中で葛藤している他のクライアントが、私がなぜ彼らの子どもの頃のことを質問したり、子どものころの思い出を聞きたがるのかを理解するのに大変役に立っています。

このクライアントのメタファーは、心理学の仕事の重要性和美しさを示しているものなのです。

更新履歴

2013年6月1日 アドレリアン掲載号より転載